
WSP—二人の能力者—

たこぴー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WSP―二人の能力者―

【Nコード】

N3272Y

【作者名】

たこぴー

【あらすじ】

第二次世界大戦後、突発的に生まれた能力者によって第三次世界大戦が起きた。

そして大戦後の世界では能力者達の犯罪が多発していた。それに対抗する物達の物語…。

プロローグ（前書き）

よくある能力物です。頭の中で急にできたようなものなのでしょう
もないかも知れませんが、どうぞよろしく願います。

プロローグ

プロローグ

不可知の能力、それは第二次世界大戦後、日本から5人突如と出現し、そしてその力を持つ人間の数が世界に急速に増えていった。

そしてその能力を使う者達のこととは不可知の人々と呼ばれた。

初めて出現した5人の能力者はG H Qのマッカーサーを始めG H Qの人間を全滅させた。

その攻撃に対してアメリカは太平洋戦争時の連合軍で日本に総攻撃を仕掛けた。

だがその攻撃は5人の不可知の人々の前には無力に均かった。そして二度にわたる核攻撃をことごとく無力化されたアメリカは日本に対して和平案を持ち掛けた。

だが日本はその案を黙殺、遂にアメリカに攻撃をした。

そして半年の歳月が経つと連合軍側が有利になってきた、その訳は不可知の人々を軍に投入し始めたからである。そしてこの大戦を第3次世界大戦と呼ばれた。

この大戦は今までの大戦よりも、多大な被害を与えた。

そして日本は今度こそ完全降伏、アメリカは二度と1年前の悲劇を繰り返さないため、再度、日本の軍隊の撤去、能力者管理そしてこのような大戦を起こさないために世界能力者解放条約を大戦参加国全々と結んだ。

この条約によつて能力者の管理及び、能力者の徴兵強制免除、が取り決められた。

だが能力者の増加によつて過激な事件、不可能犯罪等が急速に増えていった。そして能力者の犯罪等に対応するために能力対策機関W ワールドスキル ボリス SPを作った。

これは普通の人間では対抗出来ない能力者達を捕まえていくW S Pの物語。

プロローグ（後書き）

こんな、作品を読んで頂いてありがとうございます。
頑張っ て続きを書いていくのでよろしくお願いします。

WSPでの仕事

「スキルナンバー「0075」世界ランキング75位マイク・デイ
サラスあなただを能力不適切使用及び殺人未遂並びに公務執行妨害で
逮捕します！」

僕の隣にいる少女は柄の悪そうな大男にそういった。

「くそ！」

男はそう言ってその場にあつた鉄骨を少女に投げつけた。

「お願いします！」

少女は僕に対してそういった。

「了解。」

僕は少女に向かっていていた鉄筋を止めた。もちろん素手ではなく能力
によってだ。

「なるほど、身体能力強化系統の能力が…、強い力だけど僕的能力
の前じゃあ、見劣りするな。」

僕はそう言って男に向かって歩いて行く。

そして男の動きを能力で止めてしまう。

「逮捕だ。」

僕は男にそう言って男の手に手錠をかけた。だが手錠といっても普
通の手錠ではない。

WSPが能力者専用につけた、不可知の力を抑制するための手錠だ。

「お前は何者なんだ！ランキング75位の俺がこんな簡単にやられ
るなんてあり得るはずがない！」

「僕はスキルナンバー「0002」世界ランキング第二位 扇崎
ゆたか
豊だ。」

そう言われた男は僕の名前、スキルナンバー、ランキング順位を聞
くと顔面が蒼白になっていった。

「世界ランキング…2位だと…。そこまで高位のランキングの持ち
主がこの周辺のWSPに入っていたなんて。」

「失礼ですね、WSPは世界最大の能力機関ですよ？彼以上の力を持つ者もこの周辺のWSPにも少なからずいますよ。」

少女が僕の近くによって来て男にそういい放った。

「バカな！世界ランキング2位より強い能力者はランキング1位の能力者以外あり得ない！」

男は少女の言葉を完全に否定していた。

確かに世界ランキングと言うには僕は世界で二番目に強く無くてはいけない。

でもこの世の中には例外が存在する。その例外十人のことを

「不可逆の能力者、と言う存在を知らないのですね。」

そう、不可逆の能力者と言う。そもそもその存在はWSPの人間と不可逆の能力者自身しか知らない。でも少女は男にその存在を教えってしまった。

「いいのか？不可逆の能力者の存在を教えてしまった。」

僕は少女に問いかけた。

「構いません、恐らくWSPによって彼には一部記憶の消去と20年の監禁の刑が課されるでしょう。」

少女は最重要機密に近い情報を教えてしまったはずなのに、特に問題が無さそうに返事を返してきた。それもこの少女が不可逆の能力者の一人だからである。基本的に不可逆の能力者はWSPに入らない限り、行動の制限等が強制的に課される。

そこまでのことをしなければならぬほどの力を持つ者が不可逆の能力者なのだから。

まあ、その行動を制限することすらかなわないものもあるらしいけど……。

だから今WSPには彼女を含め5人の不可逆の能力者が在籍している。

「行きますよ、車も来たみたいですし。」

少女の言う通り、僕達の前方に車がやって来ていた。

「ほら行くぞ。」

僕は男の身体を引っ張り車まで連れて行った。

「お願いします。」

男をWSPの連行専門の役員に渡し、僕は少女の方へ向かった。

「ご苦労様です。」

「いやいや、これくらい何ともないよ。」

「そうですが、あなたの功績には労いを言うには十分過ぎるので。」

そう言えば能力者はWSPに必ずしも入らないといけない訳ではない、でも僕はWSPに入っているその訳は二ヶ月前までさかのぼる。

WSPでの仕事（後書き）

まあ、最初なので書けるところまで書いてみます。
ここまで読んで頂いてありがとうございます！

しょうもないことが僕の生き甲斐を見つけた。

二ヶ月前：

僕は世界ランキング2位だと勧告されて半年が経とうとしていた時期だった。

その時の僕は自分がほぼ世界最強であるがために僕は随分と荒れていた。

その半年では一度も犯罪に手を出すことはなかったが、この地域の不良を全滅に追いやったことによってWSPに殺人の疑いをかけられていた。

もちろん不良を全滅に追いやった理由は向こうが僕に喧嘩を吹っ掛けてきてなぐってきたから仕方なく正当防衛で攻撃をしたからである。

「あなたがスキルナンバー「0002」世界ランキング第2位の扇崎 豊さんですね？任意同行してもらっていいですか？」

不良を全滅させていた一部始終を見ていたと思われるWSPの少女が僕に話しかけていた。

「誰だ…。」

不良が全員気絶している前で僕は少女にそう返事を返していた。

「私ですか？私はスキルナンバー「0006」世界ランキング10st、不可逆の能力者、WSPでの階級は警部補、名前は柳谷茜です。」

「そうか…、で、なぜ僕に任意同行を求める？」

その時の僕は何故任意同行をしなければならなかかった。ただ正当防衛しただけだと思っていたから。

「あなたは馬鹿なのでしょうか？この状況でしらを切れると思っているのですか？」

「誰が馬鹿だと？お前僕が誰だかわかっているのか？お前ごとき一瞬で倒すことぐらい造作も無いぞ？」

その時の僕はしょうもないことでも怒りを覚えてしまった。

「そうですか……。では仕方ありません、来なさい相手をしてあげます。」「不可逆の能力者だがなんだか知らないけど、僕に闘いを挑もうなんて無謀だな！」

僕は自分の出来る限りの能力攻撃を少女に向かってした。

「世界ランキング2位の力はこの様な物ですか。」

少女に向かっていた攻撃は少女の顔前で消滅してしまっていた。

「今ので分かりましたよね、任意同行してもらいます。」

確かに僕と少女の間には圧倒的と言っても良いほどの力量差があった。

「聞こえましたか？行きますよ。」

少女に引つ張られ僕はWSPの支部に連れて行かれたそして僕は少女にWSPの支部で事情聴取を受けた。「分かりました。あなたはもう帰っても良いですよでいいです。」

そう言われた。

「当たり前だ、こっちは正当防衛で向こうには怪我一つさせていない。」「そうですね、ですかあなたをこのまま放って置くといずれ犯罪に手を出すかも知れませんが、どうですか？このまま自分の能力を腐らせるよりWSPに入りませんか？あなたほどの能力者なら試験も免除されますし。」

その言葉を聞いたとき一瞬自分にも役にたてることがあることに喜びを感じた。

自分のあまりにも強すぎる能力が、役にたてる、それだけで僕は心の底から喜んだ。

何故今までWSPに入る。ということに気づかなかったのか不思議だった。

僕は考えるどころか直ぐに返事をした。

「わかった、WSPに入るよ。」

「分かりました。では上司に報告してきます。少しの間待っていて下さい。」少女にそう言われて一時間ほど待っていると、「お待た

せしました。まずこの書類サインを書いて下さい。」

少女に言われる通り書類にサインをした。

「書いたよ。」

「では、こちらに着いてきてください。」

彼女に手を引かれ別の部屋に行った。

「ここでああなたの全力を見せてもらいます。」

「でもさっき柳谷さんだっけ？に攻撃したのが僕の本気だったけど。」

「

「柳谷でいいです私の方が年下でしょうから、それに今、全力を見せて貰う理由は面接見たいな物です。」

「そうなんだ、でもさっき試験は免除されるって言ってたような…。」

「

「それは筆記試験のみです、しかもこの面接は形式上でやっているのでどのみち心配しなくてもあなたは合格します。」

「そうか…。」

僕は彼女に言われた通りに最大限の攻撃をしようとした。が、一瞬で止まり柳谷に質問した。

「あつ！こつて全力で攻撃しても大丈夫かな？潰れたりしたら大変なんじゃない？」

「大丈夫です。この施設は核兵器の攻撃を受けても耐えることが出来ます。もしあなたの全力が核兵器以上ならばこの施設は壊れる可能性がありますが、その時は私が何とかします。」

「じゃ、遠慮なく。」

僕はもう一度攻撃をしようとする。

そして僕は最大限の攻撃を壁に放った。

ドオン！と壁に攻撃が当たる音がした。

「まずい！」

柳谷の叫ぶ声がした。

そしてその声が聞こえた時には僕の攻撃は消滅していた。

「能力が先ほどより強くなっている？どういうこと？」柳谷が何か

を呟いていたが僕は攻撃をした壁を見ると、きれいに穴が空いていた。

僕の全力は核兵器を越えているのか…。

僕は完全に理解していなかった自身の能力の強さに驚きを隠せなかった。

「おめでとうございます、合格です。」

柳谷はそう言いながら近づいてきた。

「ありがとう…。」

「さて、今からあなたには私の補佐の立場になって貰います。いいですね。」

「えっ！補佐！？」

「勿論、あなたはまだ新人ですし、まだわからないことも沢山あるでしょう、だからあなたには四ヶ月私の補佐の立場になって貰います。」

「仕方ないか…。」

僕はうだなれながら柳谷に言った。

「そうそうあなたの能力、召喚師^{サモナー}としての力、召喚は捜査、逮捕、

尾行、戦闘のどれにも使えます。期待してきますよ扇崎君。」

「そう…。」

僕は柳谷に褒められて照れてしまっていた。

しょうもないことが僕の生き甲斐を見つけた。(後書き)

毎度、ありがとうございます。
まだ頑張っ書いていきます。

こんなじゃれ合いがWSPのデスクワークなのか？——いいえ、そんなわけ無いで
題名は長くなっていますが、中身は短いです。すみません。

こんなじゃれ合いがWSPのデスクワークなのか？——いいえ、そんなわけ無いぞ

「ハア。」

僕は柳谷を見ながらため息をついた。

「何を考えているんですか？」

「いやいや、別に何も無いよ。」

僕は柳谷の質問に嘘の返事を返してしまった。

本当は柳谷のことを考えていたから。

本人の前でそんなことを言えるはずもなく僕は嘘をついてしまっていた。柳谷のことを考えていたのは勿論柳谷が可愛いからに決まっている。

綺麗でいつまでも見ていたい茶色の瞳。さらさらで後ろで纏められたブロードヘア、真っ白でいて不健康さを感じさせない艶々の肌。

スタイルも胸を除けば最高だし。（胸はないけど。）魅とれないのはおかしいぐらいの美少女だ。言うか魅とれなかったら僕なら即座に眼科に行くことをおすすめするよ。

「扇崎。」

この一ヶ月で柳谷との距離は少し縮まった。

具体的に言えば、扇崎君から君が抜けたとか。

「ん？何？」

「最近この地域の能力事件が多発しています、もしかしたら能力犯罪組織が新しい結成されたのかもしれませんが、なのでいつもよりもっと年密にパトロールしますよ。」

「了解。」

僕たちはその後三時間パトロールをしてWSPの支部に帰った。

「ただ今戻りました！」

柳谷がそう言う。

「お帰りなさい。」

と誰かが返事を返してきた。

「お疲れ様、扇崎巡査、それに柳谷警部補。」

誰が返したかと言うと、優しそうな中年男性が返事を返していた。その人物こそWSPの近畿第三県警の署長、水無月 源蔵警視正である。

「いやー、ご苦労ご苦労。」

この近辺のWSPで君たち以外あのマイク・ディサラスを逮捕出来なかっただろう。大変だっただろう、今日はもう帰っても大丈夫だよ。」

「いえいえ、まだ四時間ほど勤務時間がありますので、遠慮しておきます。そうですね扇崎？」

柳谷がそう言ってきた。

「えっ！？休まないの？」

「遠慮しておきますよね？」

柳谷がそうつめよって来た。

ヤバイ柳谷が怖すぎる。

「はっ！はい！遠慮しておきます！」

僕がそう言っていると署長は「そうかい、なら少しでも良いから休憩しなさい。」

「わかりました、ではお言葉に甘えて。行きますよ扇崎。」

柳谷に引つ張られ休憩所へと向かう。

そう言えば柳谷に引つ張られるの慣れてきたような。

「そう言えばさ、スキルナンバーってランキングとどう違うんだろ？知ってる？柳谷？」

僕は休憩所で飲み物を飲んでいるとふと思い付いたことを柳谷に聞いていた。

「はあ、スキルナンバーですか、普通は聞かないものなんですけどね。」 「そうなのか？」

「はい。本来スキルナンバーと言うものはですね、人数に制限の無く不可知人々が全て持っているランキングと違ってスキルナンバー

を持っている人数は決まっています。」

「何人なんだ？」

僕は柳谷にそう質問を返した。

「あなたはバカですか？ スキルナンバーは四桁の数字ですよ。普通に考えればわかるじゃあないですか。」

むう、そこまで言わなくていいじゃないか。

まあ、いい。

話を続けるか。

「そう言われれば四桁だな、じゃあスキルナンバーを持っているのは9999人なんだね。」

「その通りですが、不可逆の能力者を含めると10009人です。」

「それじゃあ、スキルナンバーを持っているのは上位9999人をより分かりやすく分けるためなんだ！」

「いえ、そう言うわけでは無いのですけど……。」 柳谷が小さく

何かを呟いていたけど聞こえなかった。

「ん？ 何か言った？」

「いえ、別に何も言ってますんが？」

「そう？」

「そろそろ休憩は終わりにしましょうか。十分休みましたし。」

「そう言われれば休憩を始めてもう一時間ほど経っていた。」

「ん、そうだなそろそろ行くか。」

「扇崎、その書類を取ってください。」

「いいけど、僕は何をすればいいのかな？」

「いえ今日は特にしてもらうことはありません。暇でしたら他の誰かの手伝いでもしてきたらどうですか？ でもその前にその書類を取ってくださいね。」

柳谷に言われた通りに書類を渡して他の人の手伝いに向かう。

「何かする事は無いですか？」

僕は上司の1人でとても優しくて月1で僕と柳谷と一緒に仕事をするときがある、23歳独身、皆阪巡査部長に話しかけた。

「独身って説明要らない？」

「勝手に人の心を読まないで下さいよ。」

「仕方ないじゃない、読心^{テレパシー}は私の能力の一部何だし。」

この人の前だと隠し事が出来ないから困るな。 ん？今頭にインスピレーションがわいたぞ。

読心が能力だけに独身ってな。 ハッハッハ。

「面白く無いわよそのネタ。」

「いや、皆坂さんはスルーして説明を続けよう。」

「無視か…。」

彼女が 23歳で巡査部長という立場の理由は彼女がランキング2467位で僕と柳谷を除くこの近畿第三県警に所属するスキルナンバー持ち二人の内の1人だからである。

それならランキング2位でスキルナンバー持ちの僕も平巡査はおかしいじゃあ無いかと言われるとそうでは無い。 皆阪巡査部長は検挙率は近畿第三県警でトップだし、WSPに入ってもう5年経つ。だから彼女は巡査部長という役職なのだ。

まあ、柳谷の場合は本当に例外だけど。

「まあいいわ、疲れたから肩もんで。」

「えゝ、マジですか？」 「うん、マジで。」

皆阪先輩に笑顔で言われた。

「わかりました。」

僕は項垂れながら返事をして皆阪先輩の肩を揉み始めた。

「良いね、なかなか気持ちいいよ。」

そして一時間近く経った。

「他に何かすること無いんですか？」

「無い、わね。」

きっぱり言われた。

「だってさ君、試験免除者でしょ？そうなるとやっぱり、頭の良し悪しで入った訳にはならないじゃない。それに君は知らないかも知れないけど本来WSPに入るには相当頭が良くて、能力持ちでない

と入れない。言わば一流企業並みの、いえ政治家並みに就職しづらい仕事なんだよ。」

「えっ！？そこまで入り難い仕事なんですか？」 「そうなの、だからデスクワークとかは試験免除者には基本的には任せてないの。」

まあ、でも柳谷警部補は試験免除者でも十分に仕事の出来る完璧超人みたいな者よ。」

「でも、WSPは五万人を越える大組織だったはず。」

「それは全世界で、日本でのWSPで働いている人数は全国で2000人ほど、大体ひとつの県で50人ほどしかないの。でも日本のWSP職員はスキルナンバー持ちがとても多いから50人でも事足りるの。大体ひとつの県警で一人はいるわね。」

そう思えばこの近畿第三県警はスキルナンバー持ちが多いわね、どこのWSPと比べても、四人も居るなんてアメリカ本部ぐらい。ということとはアメリカ本部にも匹敵する人数。しかも1人は不可逆の能力者、それとランキング2位。すごい、本部以上の力を持っていると思うわ！」

何故か皆阪先輩は一人で盛り上がっていた。

とりあえず面倒くさいので。「そうですか…。」と頂垂れながら言っただけを去った。

去ったのはいいが暇になってしまった。

「柳谷何かすること無いのか？」

やっぱり柳谷を頼ってしまった。

「戻って来たのですか…。まあいいです。この書類とあの書類をまとめておいて下さい。」

「了解。」

言われた書類を手にとってまとめようとしていたら、一枚だけ地面に落ちてしまった。

「これってこの辺りの最近の能力事件のまとめだね？」

「そうですよ、多いでしょ？だからこちらも最近パトロールを強化しているのですよ。」

「本当に多いな、どうなっているんだ？」

「分かりません。そうそう明日は非番でしたね少し療養をしましよ
うか。」

「やった！久しぶりの非番だ！」

「嬉しいのはわかりました。分かったら早く書類をまとめて下さい。
それにもうすぐで今日は終わりですから。」

「はいはい。」

僕はまた言われた通り書類をまとめた。

そして一時間ほど時間が経った。

「帰りますよ、扇崎。」 柳谷と一緒に帰路についた。

「まったく、毎回思いますが高んで扇崎と同室なんでしょうか、こ
れでも年ごろの男女なんですよ？本当WSP東京本部支部の対応は
役にたちませんね。」

柳谷はたいそう不満げに言った。

「まあまあ、落ち着いて。」

「あなたは良いかも知れないですけど私は少し嫌なんですよ。」

「そんなに信用無いか？」

「少なからず好きでもない男性と同棲して嬉しい女性はいませんよ。」

「そうだけど……。」

柳谷の本音を包み隠さず話す癖はやめて欲しいな。はっきり言っ
てそこら辺にいる普通の毒舌より傷つく。

少し本音をオブラートに包んでよ。

同じようなことを二回も考えるくらい柳谷の本音にはほとほとし
ていた僕がいた。

「まあ、愚痴を言っても仕方ありません。では、いつも通り晩御飯
をお願いしますね？」

柳谷は料理が出来そうに見えて実は出来ないという実に残念な女
の子だ。だからいつも僕がご飯を作ってあげている。じゃないと柳
谷はコンビニ弁当ばかり食べてしまうから。

最近は料理を僕が教えてるけどまだ全然出来ない。早く出来るようになって欲しいものだ。

「何をしているのですか？早くご飯を作って下さい。」

「はいはい、ちょっと待ってて。」

「わかりました。」

そう言つて柳谷は本棚にしまっていたライトノベルに手を伸ばして取り出した。

「何を読むんだ？」

「気になりますか？」

「まあそれなりに。」 ライトノベルは僕が持つて来たものだからね。

「そ、そうですか。そんなに知りたいなら教えてあげましょう。」

柳谷は恥ずかしそうに言つた。

「で、何を読んでいるんだ？」

「○○○○の○○」

「いやいや、伏せ字だらけで何言っているのかさっぱり分からないぞ？」「伏せないと著作権が問題になるでしょう？だから伏せたんです。でも伏せ字一つでは心配なので沢山字を伏せました。」

心配性過ぎだろう柳谷。

「そんなに僕に読んでいる本を教えたく無いのか？」

その時僕は何故か柳谷に少し意地悪をしたくなった。

「あのですね、著作権が心配なだけで別に扇崎に意地悪しようと思つてゐるわけでは無いのですよ……。」

柳谷が少し落ち込んでしまった。

「ヤバイ！落ち込んでいる柳谷もめっちゃ可愛い！」

でも、そろそろ意地悪はやめないと。いくら柳谷が可愛くても。

「嘘、嘘。別に教えなくても大丈夫だよ。」

僕がそう言つと柳谷が

「いえ、著作権に問題無いように教えればいいんですよ、そう耳打ちで教えればいいんです。」

そう言った。

「えっ!？」

柳谷がこっちに近づいて来た。

そして柳谷はそのまま柳谷の柔らかい手で僕の耳を包み込んで耳打ちをした。

女の子の手ってこんなにも柔らかいのか！

そして目の前にいた柳谷の髪からとても甘い匂いがした。

ひそひそと柳谷は自分が読んでいるらしい本の名前を言っていたけど、僕には目の前の柳谷の匂いやら感触やら吐息やらに気を取られ過ぎて柳谷が何を言っているのかさっぱり分からなかった。

「聞いていますか？」

柳谷は不満があるように聞いてきた。

「もちろん！」

「ふうん、そうですか…、なら良いです。」

すると柳谷の様子は一変して満足そうになった。

「では、晩御飯にしましょうか。」

「そうだな。」

僕は出来上がっていた料理を机に運んだ。

「いただきます。」

「いただきますね」

柳谷と一緒に食事を始めると。

「今日の晩御飯の材料は…。」

柳谷は僕が作ったパスタの具を当てようとしていた。

「ん？今日の晩御飯の材料はしめ…。」

「待って下さい！キノコだったのはわかっています！ちょっと名前が出てこないだけです！」

「そうですか…。」

「ん？何でしたっけこれ？ハッ！まさかベニテングダケ!？」

柳谷が具を当てるのに必死になっていた。

ちなみに柳谷…、ベニテングダケは毒キノコだ…。

これは柳谷が料理を出来るようになるには当分先の話だな。

そんなことを思いながら柳谷との食事は終わったり柳谷と僕は寝る時間になった。。

「では、お休みなさい。」

柳谷は自分の部屋で寝始めた。

「なら、僕も寝るか。」　僕も自室に行って眠った。

こんなじゃれ合いがWSPのデスクワークなのか？——いいえ、そんなわけ無いで

毎度、すみません。

本当にこんな話を読んで下さるあなたは天使です。いや、むしろ聖母のように優しい人です。

やはりこんな作品じゃ満足出来ない！と思う人しかいないと思いますので。

今回から後書きに最近あったことを書きたいと思います。

私は中学生なんですが、最近クラスメイト二人と話していたんですが。

「技術の先生のあの声と人の呼び方どうにかならないかな？」

私の技術の先生は男なのですが取り分け声が高く、（と言うか鼻を摘まんだような声ですけど……）の話しをしてました。（技術室前のトイレの入り口で）そして、話しが終わり、教室に帰る途中その先生後ろから追い抜いて行きました。すると何を血迷ったのか私の友達の一人が（なぜかとてもその先生の物真似が上手くて仕方がない。）

「ちよい待て。いつも笑わしてもらってるぞそのしゃべり方。」と、物真似して言いました。

私と私のもう一人の友達は何を冷やしましたが。

幸い聞こえてなかったのかニコツと笑ってその先生は先に行きました。結局聞こえたから笑ったのか、聞こえなくてただ単純に笑ったのかはいまだにわかりません。

いつその先生に呼び出しされるかわからないのは正直きついものがあります。

ちなみにその先生はいろんな噂があつて。特に有名なのが。

曰く、ある女子生徒が「トイレに行ってもいいですか？」と聞いたらしいのですが。普通なら「いいよ。」とか、「アカン、我慢しろ。」とか、「なんで休み時間に行かんかった？」とか言うはずで

す。しかしその先生はその女子生徒にこう言ったそうです。「一緒に
についてったるか？」いやいや、なんて事を言ってるしやるので
しょうか？ 犯罪者にしか聞こえない発言はやめてもらってもいい
でしょうか？

すごい馬鹿な事を言う先生の話を長々としてしまいました。が、
こんな後書きまで読んでいただきありがとうございます。では、ま
た次話を読んでもらえるよう頑張ります！

まるでギャルゲーのような事が起きた。これがラッキーハプニングってやつか。

こんにちは、相変わらずしょうもないことを書いています。すみません。今回も題名は長いですが中身は短いです。はい、すみません。言うつかこの前書き事態邪魔ですよね。今すぐ終わります、すみません。

まるでギャルゲーのような事が起きた。これがラッキーパーニングってやつか？

朝日が出始め、鳥が鳴き出した時間に僕は目覚めた。

「5時半か…。」

僕は寝ぼけ眼で時計を見た。

「起きるか…。」

毎日この時間に起きる僕は生活リズムを崩さない為にちゃんとベツドから出て着替えを始めた。

「柳谷…、はまだ寝てるよな…。今日非番だもんな…。」

柳谷は僕と違い非番の日は昼まで寝ている。

それでも生活リズムが狂わない、僕には不可能だ。

「腹…、減ったな。朝ごはんでも作るか…。」

ん…、と伸びをしてキッチンに向かう。

「何にしようかな？トーストってのも味気無いし。かといってきちんと作るとなると材料が無さすぎる…。」

僕が冷蔵庫をあさくっていると、冷蔵庫の奥からあるものが出てきた。

「ピザトースト用のケチャップか…、まあ、いいやピザトーストにするか、ちよつと違うけどハムでも乗つけて。」

僕は食パンにケチャップを塗ってハムと玉ねぎをのせてトースターに入れた。

「着替えるか。」

朝ごはんを食べ終わると自室に戻って着替えた。

「いつもより一時間ぐらい遅いけど柳谷を起こしに行くか…。無駄だと思うけど。」

柳谷は本当に非番の日になると起きるのが遅い。でもとりあえずいつも起こしに行っているから、柳谷を起こしに柳谷の部屋に行った。

「起きろよ…柳た…に。」

柳谷の部屋のドアを開けると。

いつもは寝ているはずの柳谷がもうすでに起きていた。

「お、おはよう、柳谷…。」

けど目の前にいた柳谷は寝間着姿でも制服姿でも私服姿でも無く、半裸状態だった。

「えっ…。」

柳谷の顔は見る見る内に赤くなっていった。

「お、扇崎？」

「ゴメン！柳谷！」

僕はドアを閉めた。

「柳谷の裸…。」

僕は柳谷の裸を思い出していた。

思い出すだけで顔が赤くなる。

汗で少し湿ったブロンドの髪、真っ白ながらも病的には見えない肌、裸を見られて赤く上気した顔がとても目立っていた。「扇崎君？こつちに来てもらえますか？」

柳谷は僕に微笑みながら言ってきた。

それにしても嫌な予感がする。柳谷は本気怒ると決まっていた僕を君付けで呼ぶからだ。

まあ…、それもそうか裸を見たんじゃ本気で怒られてもおかしいよな…。

僕は覚悟を決めて柳谷の部屋に入った。

「さて、扇崎君。お話しがあります。理由は…、わかってますよね？」

「はい…。」

そこから、柳谷のお説教は二時間にもわたった。

「もうこの辺りでお説教は終わりますか。」

「ふう…。」

僕は柳谷のお説教から解放されて少し息をついた。

「ところで扇崎。私の朝ごはんはありますか？」　そう聞かれて

僕はすぐさまたちあがつて、

「今から作ります…。」　と言ってキッチンに向かった。

「ハムエッグとトーストでいいかな？」

ダイニングにいた柳谷にそう聞いた。

「いいかな？誰に聞いているのですか？」

ギロツ、と睨まれた。

やっぱり柳谷はまだ怒っている。

それもそうか…、やらかしたことがことだし。

「ハムエッグとトーストでいいですか…？」

そういえば柳谷が怒っている時は敬語を使わないといけなかった…。

そもそも柳谷は年下とはいえっても実際は僕の上司だ。

いつもは敬語を使わないから忘れがちになっていた。

「はい、構いません。」　というわけで食パンをトースターに入れて、ハムエッグを作りにかかる。　10分ほど時間が経つとトーストもできた。

「どうぞ…。」

柳谷の前に食器の上に乗せたトーストとハムエッグを差し出す。

「いただきます。」

柳谷がごはんを食べる、少し場にはりつめた空気が漂う。

「美味しいです。このごはんに免じて今日のことは許してあげましょう。」

「ありがとうございます…。」

「ごちそうさまでした。」

柳谷が食べた食器を洗っていると柳谷が、「今日は買い物に行きますよ！」と生き生き言ってきた。

「いいけど…、どこに行くんだ？」

「東急ハ。ズです。」

「そうか、なら寮が出るのはもう少しあとでいいよな？」

「はい、別に構いません。」

僕は出発までに家事をした。

「そろそろ行きますよ扇崎。」

「わかってる、ちよつと待って。」

僕は急いで靴の紐を結んで部屋を出た。

まるでギャルゲーのような事が起きた。これがラッキーハプニングってやつか？

こんにちは。どうでしたか今回の話しは？

しょうもないですよ、ありきたりですよ、でも！やりたかったんです！まあ、どうでもいいですよ？

と言うわけでまず読んでいただいた人に御礼をします。

本当にこんな話しを読んでいただきありがとうございます。やはりこんな話しを読んでいるあなたは聖母のごとき優しさの持ち主です。では、誰も待つてはいないと思いますがとりあえず最近の話をいたします。

やはり中学3年になると思う事があります。

保健体育の内容や性教育の内容が過激すぎると思うのですよ。それはもう今ここでは言えないくらいに。

まあ、そんなことどうでもいいんですよ。

そういえば、最近iPodを手に入れました（タダで）理由はiPodを拾って半年たったからなんですけど手に入れてiPodをいじっていると気付いた事がありました。

iPodのビデオカメラの記録の中に2009年8月31日と書いてあるビデオを見ると、なんと！友達の家の中が録られていたんですよ。しかもその友達はiPodを持っていませんでした。何なんだ一体？と思いました。しかも未だに真相が解らないのでめちゃくちゃ怖いです。

まあ、話しはこの辺りにして終わしましょう。

相変わらずしょうもない話しまで読んでいただきありがとうございます。

では、また次話を読んでいただけるように頑張りますのでよろしくお願いします。

む？何が起きたんだ？分かるか柳谷？——いいえ、分かりません。しかし今はそん

こんにちは。相変わらず馬鹿なことばかり書いています。今回も頑
張りましたのでよろしくお願いします。。

む？何が起きたんだ？分かるか柳谷？――いいえ、分かりません。しかし今はそん

「あれ？扇崎君と茜ちゃん？ふたりで出かけるつもり？」

寮の前で皆坂さんに話しかけられた。

「はい、そうですが。どうかしましたか皆坂さん？」

柳谷が答えた。

「ふたりで出かけるなんてもしかして…、デート？」

皆坂さんが柳谷をからかった。

「そ、そんなわけあるはずがありませんよ皆坂さん！」

そうだ柳谷の言う通り、柳谷のようなキレイな女の子とデートなんて、僕が一生かかっても出来るわけがない！…自分で言ってるな
ぜか悲しくなってきた…。

「ならなんでふたりきりで出かけるの？」

僕が一人で悲しんでいても皆坂さんはまだ柳谷をからかっていた。

「えっ！？そ、それは…、そう！そうです扇崎は荷物持ちです！」

柳谷はうつむきながらそして顔を赤くしながら言った。

「へー、荷物持ちね。そう言ってる割には何か焦りを感じるの
何でかな？あ・か・ね・ちゃん？」

皆坂さんがニヤニヤしながら柳谷の顔を除き込む。

「うう。」

柳谷は皆坂さんを相手にしたせいだろう、うなっている。

「あはは、茜ちゃん照れてるね、かわいいな。」

それでもまだ皆坂さんは柳谷をからかっている。絶対この人S
だろう。

「まあまあ、皆坂さんそろそろ家の柳谷にちょっかいかけるのは勘
弁してくれませんか？」

「扇崎君、君、今家の柳谷を…って言ったよね？いつの間に茜ちゃん
と結婚してたの？私も呼んで欲しかったな、ふ・た・り、の結婚
式。」

それを聞いて慌て言葉の修正を図ろうとする。

「いや、だから皆坂さん。今のは言葉のあやと言いますかなんと言いますか…。」

「結婚、結婚、扇崎君と茜ちゃん結婚したんだ」

僕の話しを聞かずに皆坂さんは謎の歌を歌いながら向こう（寮の方）へ行ってしまった。

「…。」

柳谷はさっきから顔を赤らめうつむいたままだった。ヤバイ僕もめちゃくちゃ恥ずかしい。

「…。」

「…。」

ん？ちよつと待てよ。確か皆坂さんが向かった方向は寮だったはず…。

「大変だ柳谷！」

「!？」

柳谷は僕が声を上げるとびっくりしたように肩を上げた。

「ど、どうしました扇崎？」

まだ少し赤い顔を上げて柳谷は聞いた。

「多分だけど皆坂さん、さっきのこと寮の皆に言いふらすつもりだ！」

それを聞いて柳谷は首を傾げて、「さっきのって、デートのことですよね。」と言った。

「いや、違う。恐らくぼくたちが結婚したとかそう言う話だ…。」

「けっ、結婚!？」

赤かった顔がせつかくおさまってきたと言うのに、またしても顔が一瞬で顔を赤くしてしまった。

「や、柳谷!？気をしっかり持て！」

「結婚、結婚、扇崎と結婚。結婚、結婚、扇崎と結婚。」

柳谷はうわごとを呟いていた。

「おい、しっかりしてくれ！一人でどうにかできる相手じゃない

んだ！」

「扇崎と結婚。扇崎と結婚。」

僕が話しかけても柳谷はうわごとを呟いている。

「くっ、一人であの人をどうにかするしかないのか…。」

僕が寮の方へ行こうとすると柳谷が僕のものシャツの裾をつかんで

「あの人を追いかけても大丈夫です。」

まだ赤い顔でそう言った。

「本当にいいのか？追いかけても。」

「大丈夫です、それより早く買い物に行きましょう。」

「柳谷がそう言うならいいけど…。」

柳谷の言う通りに買い物に向かうことにした。

「扇崎。」

「なんだ柳谷？」

「さっきのことは忘れてちゃんと話して下さい。」

確かに柳谷の言われた通り僕は柳谷が話しかけて来ても黙ったままだった。黙っている理由は勿論結婚とかそんな話をされて気恥ずかしいからに決まっている。しかも話しかけて来ている相手が結婚する相手だったらと思うと、とてもじゃないけど話せない。

「あ、あの…、扇崎…？私と出掛けても楽しくないですか…？」

なぜか柳谷の表情が少し暗くなってしまう。

「いや違うよ！むしろ柳谷みたいなかわいい女の子と出かけてむしろ光栄だよ！」

「か、私みたいなのがかわいいと思うなんて変わってます…。」

「変わって無いと自分では思っているつもりんだけど…。柳谷は誰が見てもかわいって絶対言われるよ？」

「なんでそんなことを普通に言えるのですか…。」

ぶつぶつと柳谷が呟く。

「柳谷？」

「…。」

東急八。ズに着くまで柳谷はいくら話しかけても返事を返してく

れなかった。

「で、何を買うの？」

「特になにも買うつもりはありません。」

「なんだよそれは。」

なにも買うつもりが無いなんて。何をしにきたのかわからないぞ？
そこでふと僕は皆坂さんの言ったことを思い出した。「ふたりで
出かけるなんてもしかして…、デート？」

その言葉を思い出すと急に頬が赤くなった。

「やっぱりデートみたいだよな…。」

僕がそう言っていると柳谷はまた顔を赤くして、

「扇崎も皆坂さんと同じことを言うのですか…？」

上目遣いで弱々しく言った。その姿を見て僕は柳谷の可愛さを再
認識した。

「ゴメン柳谷そう言うつもりじゃなかったんだよ。」

「そうですか、ならいいですよ。」

こうして東急八。ズで特になにもせず別場所へ行ったがそこ
でもなにもせずいたら、気づけば6時頃になっていた。「そろそ
ろ帰ろうか？」「そうですね、時間が時間ですしそろそろ帰ります
か。」

「キヤー！……！」

僕達が帰ろうとしていると遠くの方から悲鳴が聞こえてきた。

む？何が起きたんだ？分かるか柳谷？——いいえ、分かりません。しかし今はそん

こんにちは。こんな話しを読んでいる人は聖母のような優しさを持つているのではないのでしょうか？と、常に思っている人です。

どうでしたか？今回の話しは？自分のにはそろそろ戦闘シーンをそろそろ書きたいなと思っています。（多分、だいぶ先になると思います…）やはり戦闘シーンとなると難しそうです。どうしまし
よう？

まあ、いいか。実際に書くときになって悩めばいいか。
と言うわけで、最近の話をします。

思ったけど書くことが無い自分に苛立ちを覚えます。

（何か、話す事が無いか思案中…。）

一つありました！よかった。

最近見ているアニメで某未来の日記の話をしました。

その時私はそのアニメで一番好きなシーンはどこか聞いていました。
ちなみに私の一番好きなシーンは一話の最後のシーンで由。さんが
「大丈夫、ユ。キーは、由。が守ってあげる。」なんですけど。

とりあえず三人いた友達の意見を挙げて見ます。

まず一人目。

「一話の3rdを倒すシーンかな？」

まあ、特に変な所は見当たりません。かくゆう私もそのシーンはそ
こそこ好きです。

次は二人です

「12thファイブの所が一番好きだな。」

これも特に変な所はありません。私もそのシーンでは笑いましたし。
最後に三人目です。

「6thの腕を切られるシーン、あの急に出てきたモザイクは笑った。」

ん？ちょっと待って下さい。何かおかしくないですか？

そこで私はその友達に質問しました。

「なんでそのシーンが好きなんだ？」

すると友達は、

「直感？」

ドヤ顔で言って来ました。私はもうそこで諦めました。直感ってなんだよ。と思いながら別の話に移りました。

と、この辺りで面白くもなんとも無い話は終わりました。

ではまた次話を読んでいただけるように頑張りますのでよろしくお願います。

できたら感想頂けると嬉しいです。嬉しすぎて小躍りします。

では、また次話で会える事ができたなら。

いや、相変わらず柳谷は可愛いな。――ハッ!? 私が可愛い? おかしな事を言う

こんにちは、今回は短いですが、お許し下さい。

いや、相変わらず柳谷は可愛いな。――ハッ!? 私が可愛い? おかしな事を言

「柳谷。」

「はい、わかってます。」

僕と柳谷は悲鳴のした方へ走って向かう。

「はあ、はあ、この辺りからですよ? 悲鳴が聞こえてきたのは。」
息を切らしながら柳谷は言った。

「うん、多分この辺りからだと思うけど。」

僕は辺りを見渡した。

「なにもありませんね。」

いくら周りを見渡してもビル以外なにも無い。

「仕方無い、召喚^{コールアップ}」

僕の前に召喚師以外認識することの出来ない不可解な紋章が現れ、そこから二匹の生物が現れた。「一体なんの生き物なんですか? 見た感じだと狼に見えますが…、普通の物と比べてずいぶん大きくないですか?」

「そりゃ、召喚生物だから普通の狼じゃないに決まっているじゃないか」 僕の前に現れた生物は普通の狼と比べても二倍以上の大きさがあつた。

「そうですね、どうりで大きいわけです。」

柳谷は恐る恐る狼の頭を撫でた。

すると狼は柳谷の顔を舐めてしまった。

「きゃ!」

「あつ!」

僕はあわてて柳谷から狼を引き離した。

「大丈夫か?」

まったく狼の手の早さには驚くところがあるよ。

「はい、大丈夫です。」 「そうか、なら良かったよ。」

そう言つて僕はポケットからハンカチを出して柳谷の顔を拭いた。

「んっ…。」

僕は柳谷の声を聞いて少し照れてしまった。
顔を拭うぐらいでこんな可愛い声を出すのは反則だろ！みんなにも僕の心の叫びはわかるはずだ。
僕は思わず柳谷を抱き締めた。

「えっ！？あつ、何をするんですか！セクハラですよ！訴えますよ！」

「うるさい！柳谷が可愛いのが悪いんだ！」

「責任転嫁！？しかも私が可愛いなんて…。」

むう、そこで照れるか…、仕方がない。

僕は柳谷から離れた。

「もう知りません！」

柳谷はそっぽを向いてしまった。

「ご、ゴメン柳谷。謝るから許して。」

「許して？」

「許して下さい、お願いします。このとおり。」 気づけば僕は土下座をしていた。

「なら仕方ありません。許してあげましょう。なので早く。」

柳谷はウズウズした様子で狼を指差した。

ん？この様子は…。ハッ！まさか！

「ねえ、柳谷？もしかして狼の背中に乗りたいの？」

僕は柳谷にそう聞いた。 相変わらず人をいじるのが好きだな、僕は。

「えっ！？そつ、そんな訳無いですよ！」

必死で柳谷は否定するけど、どう見ても乗りたいそうに見えるから哀れだ…。

「でも柳谷。こいつに乗ることはできないよ。速すぎて振り落とされるから。」

「えっ？」

柳谷はシュンと落ち込んでしまった。

「や、柳谷！？またこんど他の召喚生物に乗せてあげるから。」

そう言つと柳谷の顔が一瞬で喜色に満ちた。

しかし、柳谷はすぐに取り繕うように、

「誰も乗りたいとは言っていないません！」

「わかつた、わかつた。柳谷。」

僕は柳谷の頭を撫でながら言つた。

「わわ。止めてください！怒りますよ！」

そう言われると止めるしか無いじゃないか。

「わかつた。んじゃそろそろ悲鳴の主を探そうか。」

「そうですね、こんなところで遊んでいる場合ではありません。」

僕は狼を引き連れて搜索を再開した。

いや、相変わらず柳谷は可愛いな。――ハッ!? 私が可愛い? おかしな事を言う

こんにちは、どうでしたか? 相変わらずしょうもないですよ? 本当こんな話を読んでくださる方は聖母です。で、今回は最近あった話が全く無いのでカットしようかと思っているんですが…。本当にすみません。(多分、誰も興味無いとは思っけど…。)という訳で今回はこの辺りで終わります。また次話を読んでくださるように頑張ります。出来たらコメントをしてくださると嬉しいです。嬉しくきて宙を舞います。では、また次話で会えたら、嬉しいです。

デートの最中にこんなことが起きるなんて思っても見なかった。――誰がデートですみません。更新遅れました。しかも短いです。

デートの最中にこんなことが起きるなんて思っても見なかった。――誰がデートで

しかし一時間たつても誰も見つからなかった。

「ねえ扇崎？何かこの辺り不気味なくらい人がいないと思いませんか？」

確かに柳谷の言われた通り今さっきまで搜索をしていた所の周辺は全くと言っていいほど人が居なかった。

「そうだな、何でだ？」 僕がそう言うのと柳谷が急に動いた。

「危ない！」

気づけば後ろから雷でできた槍が飛んできた。

だが、急に飛んできた槍に僕は反応することはできなかった。だが、

「《絶対聖域》（アブソリユート・サンクチュアリ）」

柳谷が呟くと僕の周囲に白い光が現れた。

するとさっきまで飛来してきたはずの矢はどこかに消えてしまった。

「ふう、危なかったですね。」

「助かったよ柳谷。」

本当に助かった。もし柳谷がいなかったら死にはしなかっただろうけど、重傷は免れなかっただろうな。

「はい。ですが気をつけて下さい。恐らく私達は狙われています。」

「だろうな。明らかに攻撃系統の能力出しな。」 狙われるなら

気をつけなければならない。

「とにかく早くこの場から去りましょう。」

柳谷の言われた通りに僕はさっさとその場から去った。

「しかし、おかしいと思いませんか？」

「何がだ？」

「私はともかくあなたは目立つ立場にいます。」 確かに柳谷の言う通りだ。実際僕の顔を見た能力者は明らかに警戒の色を見せる

くらい僕の顔はしれわたっている。

「しかもあなたほどの能力者を気づかれずに狙おうとする者は限られているはずです。」

「そうだな、相当高位のランキングの順位を持っていないと。」

余りにも不思議で仕方がない。

「もしかすると、最近の能力事件の多発と関係あるのかも知れませんが。」

「かもしれない。」

とりあえず僕たちは寮へと戻った。

デートの最中にこんなことが起きるなんて思っても見なかった。――誰がデートで

本当に申し訳ありません。最近時間がめっきりなくなっただため更新が少し遅れるかも知れませんが、こんな話しなのに更新遅れるなよ。

と言いたいでしょ。しかしこんな話しを読んでいただける時の聖母のような優しさでどうかお許し下さい。

すみません今回も近況報告できません！

どうにかして、話の種を作れるよう日時生活も頑張ります！ですの
でまた次話を読んでいただけるよう祈ってます。

ではまた次話で会える事ができたならいいなと思いながら。

感想頂けると嬉しいです、嬉しすぎて三回転ジャンプをしそうです。

よし！これで柳谷も僕の手に落ちた！――誰があなたの手に落ちたと？――柳谷！

お久しぶりです。やっと更新出来ました。ですが今回も短いです。
すみません。

よし！これで柳谷も僕の手に落ちた！――誰があなたの手に落ちたと？――柳谷！

「もう大丈夫でしょう。」

「そうだな。」

ずっと警戒していると 疲れて仕方がないな。

「では私はシャワーを浴びて来ますので。」

「うい、了解。」

柳谷がシャワーを浴びにバスルームへ行った。

「ハア……。あのときの攻撃は一体なんだったんだ？」

確かに今まで恨みを買われる事はしたこともあった。でも命を狙われるとまではいかなかった。なら柳谷の言う通り犯罪組織が僕を危険視して暗殺を企んだのか……。僕の思いたてだと柳谷が正しい気がする、でも何か引つかかる。なんだ、こつ。なんだろ？わかりづらいな。まあ！とりあえず引つかかるんだよ！

何が引つかかるか考えて見るか……

「お……き……。お……ざき、扇崎……

！」

「ハッ！なんだ柳谷！」 「こんなところで寝ないで下さい。」

「ごめん柳谷、すぐに動くよ。」

「もう、仕方ありませんね。」

「さて。ん？」

僕は立とうとするときにあることに気づいた。

「な、なんですか……。人の体をじろじろ見て……。」

そう……。柳谷の今夜の部屋着はいつもに比べて薄いじゃないか！

「なんなんですか……？」 「……………」

僕は柳谷の質問スルーして柳谷を観察する。

「……………」、もう……………」 柳谷は顔を真っ赤にして黙り込んでしまったがそれでも僕は柳谷の観察を続けた。

すると柳谷は僕に近付いてきた。

「!？」

ガバツと柳谷は僕に抱きついてきたのである。　て言うかなんで抱きついて来たんだ? いや、それすらもどうでもいい。今は柳谷の感触や匂いを堪能しないと! 何か僕、凄い変態に見えるんじゃないか? まあ、いいか。

「扇崎…。もうこれくらいで許して下さい…。」　消え入りそうな声で柳谷は言った。

「ん? やめるのはいいけど何をやめればいいんだ?」

「だ、だから! 私をじろじろ見るのは止めてください…。恥ずかしくて死んでしまいそうです。」

よし！これで柳谷も僕の手に落ちた！――誰があなたの手に落ちたと？――柳谷！

お久しぶりです皆様。

受験勉強のせいで更新遅れます。すみません。

最低でも週一での更新を心がけます。

では最近の話でも…。

また技術の先生の話ですが自分の友達がついに呼び出しをくらいました。その友達に話の内容を聞くと、面白すぎて思い出せないこの事です。

でもおかしくありませんか？怒られていたはずなのになんで面白いんだ？

そしてもう一度友達に聞くと…、「あれは説教じゃなく漫才かと思う。」

ワオ、まさかの漫才。

これは自分の予想の斜め上どころか真後ろにいましたよ。

これからも技術の先生の話聞いていきます。

では皆さんまた次話で会える事ができたならいいなと思いつながら。できたら感想頂けると嬉しいです。嬉しすぎて太平洋横断しそうです。

ねえ豊君。——なんですが皆坂さん——茜ちゃんのことどうおもってる？——。——へ——

お久しぶりです。がんばって書きました。

こんな前書きいりませんか。すぐ終わります。

ねえ豊君。――なんですが皆坂さん――茜ちゃんの事どうおもってる？――。――へ――

ああそう言うことか、なんで柳谷の顔が赤いかわかったよ。

「ごめん、すぐに止めるよ。」

僕はすぐに柳谷を観察するのを止めた。

「で、では私はそろそろ寝ますので。」

柳谷は僕から離れて寝室に向かった。

しかし柳谷が抱きついて来るとは思わなかった。

「さて、僕も早くシャワーを浴びて寝ないとな。」

僕は浴室に向かった。

「あゝ、生き返る。」　こんな事を言うとか僕はおっさんか。

でも、今はそんな事はどうでもいいや。

今はもつと大切な事があるだろ。

例えば柳谷の事とか柳谷の事や柳谷の事と柳谷の事があるな。

ん？何かおかしくないか？よしもう一度考えよう。

まずは……………柳谷の事だな！

あれ？おかしいおかしい。いくら柳谷が可愛いからってなんでこんなに柳谷の事ばかり考えるんだ？

「不思議だ……。」

ついつい口に出してしまった。

それぐらい不思議で仕方がない。

そう言えば不思議で仕方がないで思い出した！

さっきの事を考えないといけないんだった。

「僕を狙える能力者か……。」

自分で言うのもなんだが僕自身は結構強力な能力者だ、だから僕を狙うとなるとせめて100位以内のランキングを持っていないと話にならない。

だからそれだけに僕を狙った人間は限られてくる。そしてそこからこの近辺にいる能力者を洗い出せば自ずと解答は出るだろう。

「と、なると一番大変なのがこの近辺の能力者を洗い出したあとだな…。」

今回は僕を襲った能力者の能力がわからない。というか証拠となる能力の痕が無い。接触感応サイコメトリーですら犯人を見つけるのは難しいだろう。

「これが柳谷の能力の欠点なんだよな…。」

そう、柳谷の能力は5メートル四方の柱の中にあるエネルギーを全て消し去る能力なんだよな。

「とりあえず明日署長に報告をしないと。」

僕は浴室から出て寝室に向かった。

「寝るか…。」

雷の矢…、攻撃方々が何かおかしい。

唯一の手がかりを頭に思い浮かべた。

そう、世界ランキングの百位以内にそんな攻撃方々をする奴がいたか？ わからない、それも明日調べよう。

薄れ行く意識の中そんな事を思っていた。

「起きてください扇崎！」

僕の耳元で誰かが叫んだ。

「誰だよ…、こんな朝早くから叫んでいるのは…。」

僕は目を擦りながら叫び声の持ち主を見た。

「なんだ…、柳谷か…。で何のようだ？こんなに朝早くから。」

「緊急会議です！署から緊急会議の呼び出しがかかっています。」

柳谷からの報告があつて僕は愕然とした。

「緊急会議だつて…、本当か…。」

WSPの緊急会議なんて相当な事が無い限りしなはずだ。でも緊急会議が開催された。何が起きたんだ？

「わかった、すぐに用意をする3分待つてくれ。」

「わかりました、玄関で待っています。」

僕はすぐに支度をして玄関に行った。

「行きますよ。」

僕は部屋の鍵をしめて署に向かった。

「すみません！遅れました！」

僕たちが会議室についた頃にはもう全署員が集まっていた。
「かまわない、どこか好きな所にでも座ってくれていい。」

署長に言われた。

「はい、わかりました。」

僕たちは言われた通りそこら辺の空いていた席についた。

「さて、全員揃った所で話を始めようか。」

署長が真剣な面立ちで話を始めた。珍しく話し方がきつい。

「昨晚11時37分頃に殺人事件が二件同時に起きた、恐らく同一犯の犯行だろう。しかしそれを断定するには少し厳しいものがある。」

署長がそう言うのと皆坂さんが発言をした。

「それは何故でしょうか？理由をお教え頂きたいのですが。」

「ふむ…、わかった、構わない。しかし口で説明するのはいまいち伝わりにくいはずだ、これを見てくれ。」

署長は脇に置いてあった書類を僕たちに回した。

「！？」

書類を見た僕は驚愕した。いや僕だけじゃなくて他の署員も驚いたはずだ。

なぜなら…。

「事件現場に能力結晶が無い…！」

そう事件現場には能力結晶（能力を使った後にできる物質）がなかった。

そもそも能力結晶は接触感応や読心などのものを読み取る能力以外が能力を使うと必ず生み出されるものだ。

しかも能力結晶は能力が当たったところに三時間で現れる、だから能力犯罪の時の証拠になるんだ。

不可逆の能力者は違うらしいけど。

「そう見ての通り今回の事件現場には能力結晶が存在しない。遺体

の死亡時刻は四時間前、明らかにおかしい。」

「では今回の犯行は不可逆の能力者がした可能性が高いと。」

「ああ、その可能性が一番高い。この近辺の不可逆の能力者といえば柳谷と新世界のメンバーのみだ。簡単に犯人は見つかる。」

柳谷はアリバイがあるから自ずと犯人はわかるだろう。しかし、しかし、新世界はともではないが我々だけでは太刀打ちできる相手ではない、この事は引き続き捜査を続ける、何かあれば皆に追って連絡しよう。すまなかったなこんなに朝早くから、夜勤の人は帰るといい、夜勤以外はすまないがこれから仕事に入ってくれ。」

「わかりました。」 話が終り会議室を出ると柳谷が話しかけてきた。

「扇崎、昨日の事調べなくていいんですか？何か今回の事件に関わっているのかも知れませんよ。」

確かに、言われるまで忘れてた。

「そうだな、今から調べて来るよ。」

「わかりました。私は今回の事件の資料をまとめたりしておきますので、何かわかれれば連絡をしてください。」

「了解。」

僕は資料室に向かった。しかしそこには皆坂さんがいた。

「ゲッ。」

「ゲッとは何よ。」

「別に何も無いですよ皆坂さん。」

皆坂さんと一緒だと僕の思ってることもやってることを全部柳谷に言うからな…。

「へー、そんな事言うんだ、あつ、違った。思うんだ。」

「ほら、やっぱり。」

「でも私、君が茜ちゃんをどう思ってるかは言って無いじゃない。」

うつ…、それを言われると…。

「だって、豊君は茜ちゃんがす…。」

「ワーワー！言わないで！」

「わかったわよ、でここに何しに来たの？」

「そうだ、忘れてた、皆坂さんの相手をしてたら駄目だな。」

「今年のランキング表ありますか？」

「失礼な事考えているみたいだけど、まあいいわ。はい、ランキング表。」

皆坂さんからランキング表を受け取って開いた。

「とりあえず200位まで探すか。」

ページを捲つても全然目当ての能力者が見当たらない。

「何でだ？」

「何を探してるの？」

「雷の矢を飛ばして攻撃する能力者ってランキング何位にいますかね？」「雷系統の能力者ね…。」

皆坂さんが考えている内にランキング表の方でも探しておくか。

「！？」

僕はあるページを見て驚いてしまい、ランキング表を落としてしまった。

「どうしたの？心を読んでるからわかるけど。凄い動揺してるみたいだけど。」

「皆坂さん…、自分で言うのもなんですが。何でランキング2位の所にあるの僕の情報に『ブラックアウト』（行方不明）になっているんですか…？」

ねえ豊君。――なんですが皆坂さん――茜ちゃんの事どうおもってる？――。――へ――

こんにちは、これを読んでくださる人は聖母と思っている人です。どうでしたか？そろそろ戦闘に向けての物語を作ったわけですが、はつきり言ってまだ戦闘シーンを一つも思いついていません。

では、最近の話しても。

最近塾で凄い変な質問を出されました。その内容が、
I is nine と言うものでした。初めに見たとき「ん？」と思いました。でもよく考えてみると簡単な事ですごくビックリしました。

これがわかったおかげで塾の先生からハンバーガーの券を貰いました。

そろそろ解答を、

わかる人にはわかったとは思いますが。

アルファベット順に数えていくとIは九番目です。だからさっきの英文を和訳すると…、

アイは9です。となります。よく考えれば簡単な事です、Iは私という固定観念のせいでわからなくなります。

では、最近の話はこの辺で。

また次話で会える事ができるように頑張ります。

できたら感想をいただけると嬉しいです。

嬉しすぎて寝込みます。

ではまた次話で会えることができれば。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3272y/>

WSP—二人の能力者—

2011年11月24日14時46分発行